

かつて西ベルリンの壁近くは落書きまみれの荒れた地域で、でもだからこそ家賃も安く、人口維持のために免税措置や徴兵免除があったから、貧乏アーティストたちもたくさんやってきて、不法占拠のバーやレストランがたくさん生まれ、独特の文化が栄えたのだった。壁の崩壊後、気がついたらかつての壁周辺はまさに統一ベルリンのど真ん中、廃墟同然だった古い建物は次々に改修改築され、きれいな高級マンションやオフィスとなり、そして……

かつて西ベルリンの壁近くは落書きまみれの荒れた地域で、でもだからこそ家賃も安く、人口維持のために免税措置や徴兵免除があったから、貧乏アーティストたちもたくさんやってきて、不法占拠のバーやレストランがたくさん生まれ、独特の文化が栄えたのだった。壁の崩壊後、気がついたらかつての壁周辺はまさに統一ベルリンのど真ん中、廃墟同然だった古い建物は次々に改修改築され、きれいな高級マンションやオフィスとなり、そして……

やまがたひろお：1964年生まれ。文化、小説、建築、経済と八面六臂の万能評論家&翻訳家。著訳書に『たかがバロウス本』『クルーグマン教授の経済入門』(訳)など多数。



CITY OBSERVER

西ベルリンの魂を受け継ぐ、アーティスト無法地帯。

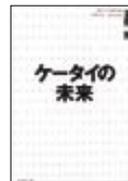
写真・文/山形浩生

BOOK REVIEW

あなたはケータイで、買い物してますか？

文/武田 徹(ジャーナリスト)

『ケータイの未来』
夏野 剛 タイムズ社/¥1,890



通話料金と一緒に情報サービス利用料を少額からでも確かに徴収できるiモードは画期的だった。その便利さで独走。ドコモを通信業界の巨人と成長させた。そんなiモードの仕掛け人だった著者は、しかし、早くからその「次」を考えていたという。ネット世界だけでなく、リアルな世界でも様々なサービス、商品と交換可能な「サイフ」としてケータイを使う。そんなコンセプトで開発されたDCMXサービスの可能性について本書は雄弁に語る。DC

MXを一言で示せばケータイが未来の貨幣になるということだ。ならばこそ私たちはここで貨幣のあり方について改めて考えてみるべきだろう。岩井克人は『貨幣論』で「貨幣は貨幣として使われている限りにおいて貨幣なのだ」と同語反復の定義を試みさせた。たとえば国家が貨幣の価値を保障しているのではない。治安の悪い国では政府発行の紙幣よりドル札が重宝されたりする。貨幣は貨幣として使えるという事実をもってこそ貨幣として信頼される。

まさに「コファクト・スタンダード」こそその原理なのだ。しかしこの信頼は根拠がないがゆえに脆い。ケータイという「新しい貨幣」も不正請求の一つでもあれば利用者は一気にそれを忌避するだろうし、利用手数料の不正な流用も厳しく断罪されるだろう。民営化で生まれたNTTのドコモが、貨幣の信頼を守り維持するという極めて公的なサービスを提供するのは日本企業か。その意味では日本企業の未来のあり方がケータイの未来を決めるのだ。

WINE SELECTION

ムートンの新規投資は、南仏産オーパス・スリー。

写真・文/柳 忠之(ワインライター)



投資というのは、誰もが手を出す前にやったが勝ちその辺り、じつに抜け目ないのが巨万の富をもつロスチャイルド家(フランス語ではロツシルドと発音)だ。5大シャトーのひとつ、「シャトー・ムートン・ロツシルド」を所有するパロン・フィリップ・ド・ロツシルドは、70年代に早くも黎明期のカリフォルニアでビジネス展開。ロバート・モンタヴィとともに「オーパス・ウン」を生み出した。続いて南米チリでは「アル

初ヴィンテージの2003年に続き04年が登場。より洗練され、バランスに秀でる。メルロを主体に、全部で6種類のブドウ品種をブレンドしたワイン。6,517円 ●0120-011-121

マビーバ。いずれも産地初のスーパープレミアム・ワインという点がミソで、ムートンのネームバリューも奏効し、群を抜くほどの高いプライスタグがつく。そして、ムートンの現当主、パロネス・フィリップ・ムートンが新たな投資先に選んだのは、南仏ラングドック地方。長らく大量生産の安ワイン供給源と見なされてきたこの土地から、「これぞ真のグランヴァン」と登場したのが「ド・メーヌ・ド・パロナーク」である。南仏ワインはヘヴィでボラフチヤスという常識を覆す、緊張感あるストラクチャーとコンプレキシティ。グラスの縁から、ただ者ではない風格が漂う。パロネスの次なる投資先は日本? てなことはないか。